

どか、^{しよくこう}職工どか、^{こあきんど}小商人どか、^{かごうしやかい}下等社會の子供であり
ます。

紀州新宮の手毬歌

4 1 1-2 3 # 4 3 2 | 3 # 4 3 3 2 | 7 6 - 0 1 |
 トリテハンヅノインサマ ニ カイカラオ チテ ナ
1-2 3 # 4 3 2 | 3 # 4 3 3 2 | 7 6 - 0 1 |
 ヨシミ ヅクレ ハ 田 クレチヨイ トクレー カ
1-2 3 # 4 3 2 | 3 # 4 3 3 2 | 7 6 - 0 1 |
 ドノマンナカノ ド ロミヅク レテ コ
1-2 3 # 4 3 2 | 3 2 7 2 3 - | 3 2 7 2 3 0 ||
 レガノ マリヨカ ドロミヅチー ドロミヅチ

取^{とり}出^で遍^{へん}照^{じやう}院^{いん}様^{さま}、二^に
 階^{かい}から落^おちて、お
 よし、水^{みづ}くれ、は
 よくれ、ちよいど
 くれ、かぞのまん
 なかの泥^{どろ}水^{みづ}く^られて
 これがのまりよ
 か、泥^{どろ}水^{みづ}を〜。

研究漫録

M H 生

▲子供の觀念界を、知ることは、吾々に取りて、最、
 必要なことである。吾々には、分り切つた言葉でも、
 中々、子供には、分らぬことが多い。不注意な者は、
 一向、其邊を、無頓着に、唱歌でも、談話でも、やつ
 て居る様であるが、なるべく兒供に適した、やさしい
 言語、文句を、使ふ様に、心掛けねばならぬ。嘗て、
 三歳から、五歳までの子供二十人に向つて、弟^{をことう}と云ふ
 言葉を、聞かせた時、子供の心に浮み出た考は、「おど
 うふ」おこうこ」等であつた。

▲數量比較の觀念の中でも、重量の觀念の如きは、小
 學以上の生徒、或は、時によると、吾々にでも、甚、
 漠然として居る、例令ば、砂糖一斤と云つても、其一
 斤は、果して、どれほどの重さであるか、實際の觀念

は、中々容易に、起らない、だから、算術など、教へるにしても、たゞ、名前だの、言葉だけでなしに、實際、一斤といへば、一斤だけの目方を取扱はして見るのが必要だと、或人が云つたが、まことに、味のある言葉である。

▲三年より四年位の子供になると、大小の比較の觀念なども、甚だ、漠然として居る。嘗て、此年齢の子供が、象を見たど、云ふから、其大いさを、問ふた所が、忽、其小さな兩手を擴げて、『この位もありました』と、答へた。

▲強弱の觀念なども、面白い。ある時、『人は虎よりも、象よりも、強いものだ』と、云つた所が、五年から、六年までの子供の中で、『それなら、蜂よりも、強いぞうか』と、問ふた子が、あつた。

▲原因結果の關係等に、至ると、一層、複雑に、なつ

てくるから、随分、面白い、可笑しい考を、發表する者が、多い、無論、複雑なものは、到底、理解させることが、できぬのであるけれども、簡單な關係は、やはり、或結果に對する、必然的原因を、悟る様に、導いて行かねばならぬ。茲に、面白い一例は滿六年になる子供に依りて、次の如く、發表せられた。

「朝顔の種を、蒔いたら、附木に字を書いて、建て、置きますとね、朝顔が、だん／＼大きくなると、何時の間にか、なくなつて、こんど紙に、字を書いて、くくりつけて置くと、こんどは、實がなります。」

